

英語が国際語といわれるのはなぜか

— Outer Circleの英語事情 —

小野 礼子

はじめに

世界の言語の中で、母語（第一言語）として使用する人々の数がもっとも多い言語は中国語であり、その話者数は10億人とも13億人ともいわれている。この中国語に続く言語が英語で、約3億5千万人の母語話者をもつ（Comrie, Matthews, and Polinsky, 1996; 中尾・日比谷・服部, 1997）。このように、母語話者数において、英語は中国語の半分にも及ばない。それにもかかわらず、中国語ではなく、英語が国際語といわれるのは、なぜであろうか。本稿では、英語が国際語といわれる理由を社会言語学的視点から考察する。まず、互いにかかわりあう三つの理由について述べる。次に、それらの理由が意味する事柄の中でもっとも重要と思われる点、すなわち、Outer Circle—英語を第二言語して使用している地域—における英語の妥当性について考える。

1. 国際コミュニケーションの共通語としての英語

英語が国際語といわれる第一の理由に、英語が国際コミュニケーションの手段として世界的に使用されていることが挙げられる。英語は現在、国際ビジネス、貿易、観光業界、マスメディア、国際会議、スポーツ、インターネットの主要言語であり、空港、航空管制塔の共通語である。マーケティング・コンサルタント会社のグローバル・リーチ（本名, 2003参照）の2002年の調査によると、世界のインターネット利用者の40.2%が英語を使用してい

るという。中国語、日本語、韓国語の三言語の使用者は全体の26.1%と、健闘しているものの、特に日本語、韓国語によるインターネット情報の及ぶ範囲は、各々ほぼ国内に限られており、国際的な情報の伝達を考えると、英語の優位はゆるぎないものといえる。また、毎年世界で刊行される新刊書のおよそ5分の1が英語で書かれたものであり、世界の科学者の3分の2以上が英語で論文を発表しているという（Crystal, 1988）（中尾・日比谷・服部, 1997参照）。さらに、NGOが推進する国際協力プロジェクトで使用される言語も英語の場合が多い（本名, 2003）。

英語はまた、EU（欧州連合）諸国においても、その重要性が認められている。日本の国立国語研究所（本名, 2003参照）は、1996年に、世界各国に「今後世界のコミュニケーションで必要となると思われる言語」を五つ挙げてもらうという調査を行った。その結果、EU諸国でも英語という回答が圧倒的に多く、英語が1位となった国は、フランス（英語96%、2位：フランス語55%）、ドイツ（英語96%、2位：ドイツ語54%）、オランダ（英語96%、2位：スペイン語34%）、イタリア（英語95%、2位：フランス語29%）、スペイン（英語94%、2位：カステイリア語59%）、イギリス（英語90%、2位：フランス語56%）であった。

このように、英語は、さまざまな分野で世界的に使用され、国際コミュニケーションにおいて欠かせない言語として認識されている。このような事実から、英語が国際語といわれるのは当然であるといえよう。英語がこのような地位を獲得した背景には、17世紀から20世紀半ばまで続いたイギリスの世界における植民地支配及び20世紀からのアメリカの政治的・経済的勢力の台頭がある（土屋・広野, 2000）。とりわけ、イギリスの植民地支配は、英語が国際語といわれるようになった理由を考えるうえで、非常に重要な意味をもつ。長期にわたる宗主国の植民地支配は、被支配地域に新たな英語の変種を芽生えさせ、英語の非母語変種とその使用者の拡大を招くことになったから

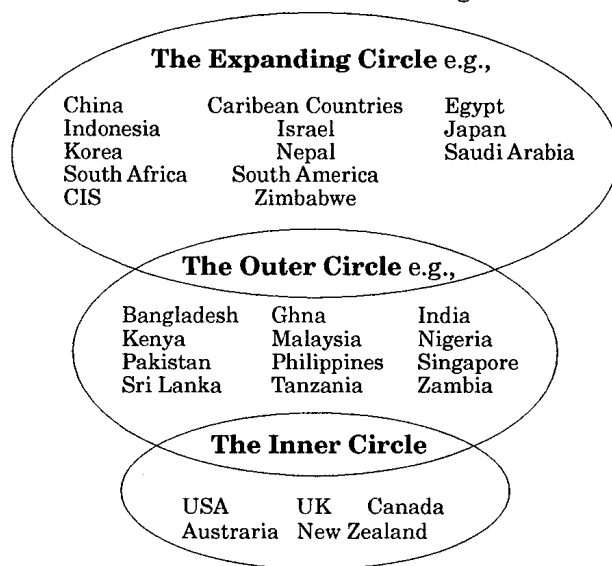
である。この事実を抜きにして、英語が国際語といわれる理由を語ることはできない。また、アメリカの世界に及ぼす政治的・経済的影響力は、英語を母語としない英語使用者や学習者の人口の増加に拍車をかけることとなった。次節では、このような点について考察する。

2. 第二言語・外国語としての英語使用者

英語が国際語といわれる第二の理由に、英語の場合、第一言語、すなわち、母語として使用する人々に加え、第二言語として、さらに外国語として使用する人々の数が、ほかの言語の場合と比較して圧倒的に多いことが挙げられる。Kachru (1992b) は、英語は今や、多様な文化的アイデンティティーをもつ言語であると提言しており、Smith (1999: 18) は、「国や文化の数だけ英語は存在」すると述べている。この社会言語学的現実を捉えるには、「English」は、「Englishes」となるべきであると主張して、「World Englishes」という用語を提唱したKachru (1992b, 1996) は、図1のように、世界の英語を Inner Circle、Outer Circle、Expanding Circle の三つの圏に分類している。¹⁾

図1. 英語の三つの圏

Three Concentric Circles of Englishes



(Kachru 1996: 1より)

Inner Circleとは、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアなど、英語を第一言語としている国や地域を含む圏のことである。**Outer Circle**とは、インド、シンガポール、フィリピン、ナイジェリア、タンザニアなど、英語を第二言語として使用している国や地域を含む圏のことをいう。主としてイギリスやアメリカの植民地であった国々がこの圏に属し、英語は旧宗主国の統治下にあった時代から公用語として使用されている場合が多い。そして、**Expanding Circle**とは、英語を外国語として使用している国や地域を含む圏のことで、日本、中国、韓国、インドネシアなどはこの圏に属する。

前述のように、英語を第一言語として使用する人々（**Inner Circle**の英語母語話者）の数は約3億5千万人といわれているが、英語を第二言語として使用する人々（**Outer Circle**の英語使用者）は約10億人、英語を外国語とする人々（**Expanding Circle**の英語使用者）は約7億人に及ぶといわれている。つまり、英語母語話者に英語を母語としない英語使用者を加えると20億5千万人となり、世界の人口のおよそ3分の1にあたる人々が何らかの形で英語を使用していることになる（本名, 1996a, 1996b）。この事実だけを取り上げても、英語は国際語であるといえよう。しかし、英語非母語話者、特に英語を第二言語とする**Outer Circle**の人々が、どのような目的で英語を使用するのかを認識しなければ、本当の意味で英語が国際語といわれる理由に迫ったことにはならないであろう。そこで、次に**Outer Circle**における英語について考察することにする。

3. **Outer Circle**における英語

英語が国際語といわれる第三の理由に、英語自身が国際化したことが挙げられる。すなわち、多くのイギリス国民の誇りであり、イギリス文化の象徴であった英語が、アメリカ英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語というように、イギリス人以外の母語話者をもつようになっただけでなく、

インド英語、シンガポール英語、ナイジェリア英語というように、英米文化とはまったく異なる、Outer Circleの多様な文化をも背負う言語になったということである。この英語の国際化こそが、英語が国際語といわれる理由の中で、もっとも重要な意味をもつといえよう。なぜならば、この理由を正しく理解することが、英語の非母語変種、とりわけOuter Circleの変種に対する否定的な言語態度の是正の第一歩となるからである。

宗主国による植民地支配終結当時のOuter Circleにおいては、現地化(nativized)した英語は、政治的解放や現地の人々の誇りを意味するものではまったくなかった。それどころか、英語の使用を廃止し、英語の代わりに現地の言語を使用すべきであるというのが大方の人の考えであった(Kachru, 1992a)。しかし現実には、英語はその後も現地の人々によって使用され続け、それが近年、“non-native Englishes”として注目されるようになったのである。

3.1. 英語使用者及び英語使用に関する六つのfallacy

Outer Circleの英語は、これまで、特に英語母語話者からさまざまな誤解と偏見を受けてきた。Kachru (1992a, 1992b) は、“Englishes”という社会言語学的現実がなかなか認識されないという事実の背景に、こうした誤解や偏見があることを指摘し、英語非母語変種に対する否定的な言語態度の根底にある英語使用者と英語使用に関する六つのfallacy (誤った考え) を挙げ、各々に対して反論している。

Fallacy 1 — Outer CircleとExpanding Circleの地域では、英語母語話者とのコミュニケーションを図るために英語が学習される

この考え方は、英語使用者及び英語使用の現実の一部しか捉えていない。英語は、母語話者と非母語話者とのコミュニケーションのためだけに使用さ

れるのではなく、インド人とナイジェリア人、日本人とスリランカ人、ドイツ人とシンガポール人とのコミュニケーションといった、非母語話者同士のコミュニケーションの手段としても使用される。後者の場合、非母語話者が母語変種であるイギリス英語やアメリカ英語の言語使用の規範に従う必要はなく、むしろ、そうすることが不適切と捉えられる場合さえある。

Fallacy 2 — 英語は英米の文化的価値を理解するための手段として学習されるべきである

この考えにも一理あるが、Outer Circleの地域では、英語は、英米の文化的価値を理解する手段としてよりもむしろ、現地の伝統や文化的価値を表現する手段として使用されている。英語がこのような役割を担っているのは、多言語国家において、英語は、現地の諸言語と異なり、どの国民にとっても中立的な言語、すなわち、国内の諸言語・諸文化の境界を越えることのできる唯一の言語であるからである。このような社会では、英語は、高等教育、行政、メディア、国内及び国際ビジネスの言語であり、文学的創造性をはぐくむ言語なのである。

Fallacy 3 — 英語学習・英語教育における英語の手本には、母語話者の規範を採用すべきである

これも妥当な主張とは言い切れない。Outer Circleの国々では、英語が制度化 (institutionalized) されており、教育のある大多数の話者が用いる現地変種が教育現場で用いられ、行政官、教育家、政治家、法律家によってさまざまな場面で使用されている。英語使用が世界的な規模に及んでいる現在、「母語話者」という概念は、英語の手本の基準として必ずしも妥当であるとはいえない。

Fallacy 4 — 非母語変種の英語は、母語変種のような英語に到達するまでの途中段階にみられる「中間言語」(interlanguage)²⁾である

第二言語習得理論における「中間言語」の仮説にどのような妥当性があるうとも、Outer Circleに属する地域の制度化した英語に関しては再評価されるべきである。

Fallacy 5 — 英語母語話者の教師、教育機関の管理者、教材開発者は、世界の英語教育において、重要な役割を果たしている

実際のところ、英語母語話者が世界規模に及ぶ英語使用及び英語教育において、顕著な役割を果たしているわけではない。

Fallacy 6 — 英語の多様化は、必然的に英語の言語的墮落を招くが、これに制限を加えるのは、英語及び英語教育に携わる母語話者の研究者が果たすべき責務である

この見解は、いかなる程度であれ、母語変種の規範から「逸脱した」英語は「誤り」(error)であることを意味する。しかしこれは、Inner Circleとは明らかに異なる社会言語学的状況（特にOuter Circle）における英語の機能的適切性を無視した考えである。

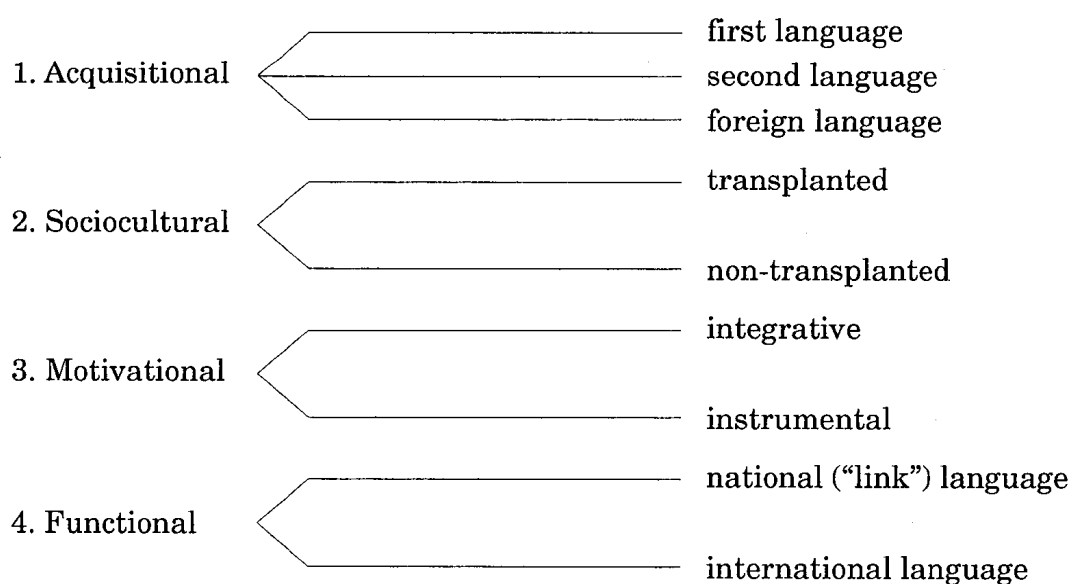
以上、英語使用者及び英語使用に関する六つのfallacyをみてきたが、これらがいかに妥当性の低い見解であるかは、英語の多様性をさまざまな角度からみることによってさらに明らかになるであろう。そこで次に、英語の多様性を考えるうえで役立つ四つの観点について述べることにする。

3.2. 英語の多様性と四つの観点

Kachru (1986, 1992a) は、英語の多様性は、英語をある一つの観点から

ではなく、たとえば図2が示すように、言語習得 (acquisitional)、社会文化 (sociocultural)、学習動機 (motivational)、機能 (functional) の四つの観点から捉えるべきであると述べている。これは、Outer Circleの英語を理解するうえで重要なことといえる。

図2. 英語の多様性の理解に必要な四つの観点



(Kachru 1992a: 54より)

まず、言語習得の観点とは、英語が母語変種（第一言語）であるのか、非母語変種であるのか、また、非母語変種の場合、第二言語としての英語 (English as a second language) であるのか、それとも外国語としての英語 (English as a foreign language) であるのかということである。Kachru (1986, 1992a, 1992b, 1996) は、第二言語としての英語の変種 (Outer Circle の変種) は、基本的に制度化した変種、すなわち、institutionalized variety であると述べている。南アジアや西アフリカの英語のように、institutionalized variety は、公的に認められ、長期間にわたり、さまざまな分野や状況で幅広く使用されている。語彙や様式 (style) には、現地化がみられ、この変種で書かれた英語文学は、豊かなローカル色を醸し出している。また、

institutionalized varietyの使用者は、この変種に対して愛着を感じているという。これに対して、外国語としての英語の変種（Expanding Circleの変種）は、主に運用上の変種、すなわち、performance varietyであるとKachruは述べている。日本やイランにおける英語のように、performance varietyは公的な地位をもたず、観光事業、商業、その他の国際業務など、限られた状況でのみ使用されている。

二つ目の社会文化的観点というのは、英語（の変種）がイギリスから新しい社会文化的状況に移植された（transplanted）ものか、そうでないか（non-transplanted）ということである。この区別は、移植された英語の変容（acculturation）と現地化（nativization）を考えるうえで重要である。母語変種のアメリカ英語や非母語変種のインド英語は移植された変種に、イギリス英語はそうでない変種に入る。英語の社会文化的移植は、イギリス文化と表裏一体であった英語がイギリスから、たとえば、アメリカに移植されてアメリカ人の母語となり、さらに、欧米とはまったく異なる文化をもつインドに移植され、インド社会に根付き、インドの文化や伝統を表現する言語となったことを意味する。前述したが、このように、英語が南アジア、東南アジア、西アフリカなど、Outer Circleの多様な文化をも背負う言語になったことは、英語が国際化したことを示している。このことにこそ、英語が「国際語」といわれる真の意味があるとKachru（1992b）は述べている。

三つ目の学習動機の観点とは、英語学習の動機が総合的（integrative）であるか、それとも道具的（instrumental）であるかということである。一般に第二言語及び外国語学習の動機づけ（motivation）は、総合的動機と道具的動機の二つのタイプに大別される。総合的動機とは、英語学習の場合、母語話者であるイギリス人やアメリカ人について知りたい、彼らとコミュニケーションを図りたい、あるいは、彼らの文化の一員になりたいというようなことを願って英語を学習しようとするものである。これに対して、道具的

動機とは、仕事や試験のためといった、実用本位の目的のために英語を学習しようとするものである（Oller, Beca, and Vigil, 1977; Richards, Platt, and Weber, 1985）。

本名（1996a, 2003）によると、インド人を対象に行ったある調査で、英語を学ぶ理由を尋ねたところ、回答の多い順から、次のような結果になったという。

1. 科学技術の分野で最新の情報を獲得するため
2. 国際コミュニケーションのため
3. 母語の異なるインド人同士のコミュニケーションのため
4. 高等教育のため
5. 世界の情報を得るため

これら（特に、1、3、4、5）は、英語学習の道具的動機であると考えられる。英語学習の総合的動機といえる「英語国民の文化を理解するため」という理由は、回答数の半数にも及ばず、下位にランクされたということである。この調査の結果は、3.1.で述べたFallacy 2（英語は英米の文化的価値を理解するための手段として学習されるべきであるという見解）の妥当性の低さを物語っているといえよう。

最後の機能上の観点とは、英語が母語の異なる国民同士の国内共通語〔national (“link”) language〕として使用されるのか、それとも、国際コミュニケーションにおける共通語、すなわち、国際語（international language）として使用されるのかということである。英語の多様性を理解するうえで、この機能上の区別は重要である。なぜならば、3.1.で述べたFallacy 4（非母語変種の英語は、母語変種のような英語に到達するまでの途中段階にみられる「中間言語」であるという見解）やFallacy 6（英語の多様化は、必然的に

英語の言語的墮落を招くが、これに制限を加えるのは、英語及び英語教育に携わる英語母語話者の研究者が果たすべき責務であるという見解) が示すように、Outer Circleの国において、母語変種の規範から「逸脱している」として、しばしば非難的になる現地変種は、母語が異なる国民同士の国内共通語として使用されるものであって、国際語として使用されるものではないからである (Kachru, 1992a)。つまりこれは、母語話者とはまったくかわりのない社会言語学的状況で使用される英語について、母語話者が立ち入って非難していることになり、母語話者の「内政干渉」といえよう。これは、母語話者・非母語話者にかかわらず、認識すべきことである。ちなみに、Outer Circleの国において、国際コミュニケーションのために英語を使用する人々は、国内の英語使用者全体のほんの一握りにすぎない (Kachru, 1992b)。そして、国際語として使用される現地変種の規範と母語変種の規範との間には、発音を除き、大差はないといえる。

ここでは、英語の多様性を捉えるための四つの観点について述べたが、これらを総合すると、Outer Circleに属する国々の英語の妥当性がみえてくる。Outer Circleの英語は、母語変種のイギリス英語やアメリカ英語が、主に植民地支配によって現地に移植され、現地の人々の言語としてふさわしい形に変容・現地化を遂げたものである。Outer Circleでは、英語は基本的に、それぞれの国において制度化されており、国内の公的な場面や状況で幅広く使用されるとともに、異なる母語を有する国民同士の共通語としても使用されるなど、国内において重要な役割を果たしている。また、Outer Circleの英語は、英米文化とはまったく異なる文化的アイデンティティーをもち、それは、現地の作家によって書かれた英語文学にも巧みに描かれている。「Outer Circleの英語」というと、くだけた場面で使用される現地特有の口語英語を思い浮かべる場合が多いが、Outer Circleの英語にも、発音や語彙を除き、イギリス英語やアメリカ英語の標準変種とほぼ変わらない標準変種が存在す

る。前者は、主に国内のくだけた場面や状況で使用され、後者は公的な場面や状況で用いられるほか、国際コミュニケーションの言語としても使用される。前述したように、Outer Circleの英語は、これまで主に母語話者によって、たびたび「母語変種の規範から逸脱したことば」や「中間言語」とみなされ、否定的に捉えられていたが、このような言語態度は不適切であり、改められるべきであることがわかる。

4. インドの英語

前節では、Outer Circleの英語全般について、その妥当性を探ったが、ここでは、Outer Circleの英語の一例として、インドの英語を取り上げることにする。

4.1. 準公用語としての英語とその背景

インドは人口約10億人の多民族多言語国家である。インドの公用語はヒンディー語であるが、英語も公用語として併用が可能であり、そのため、しばしば「準公用語」と呼ばれている。インドはまた、州ごとに公用語を定めており、インド憲法第8付則で指定されている言語の中から、一つ以上を州公用語とすることができる（榎木蘭, 2002）。³⁾

イギリスによるインド支配は、イギリスが東インド会社を設立した17世紀に始まった。英語はこの時期にインドに移植され、インド各地にミッションスクールが開設された18世紀にインド社会に普及し始めた。1857年には、イギリス式の大学が創設され、その後、英語を教育媒体とする私立の初等学校や中等学校も開設され、英語は、エリート層の言語として、インド社会に浸透していった（本名, 2003）。

上述のように、現在、英語は、インドの準公用語であるが、1947年にイギリスから独立した当時は、インド政府に旧宗主国の言語である英語を公用語にするという考えはなかった。政府は1950年の憲法において、インド人とし

ての国民意識を育むために、全人口の4割の母語話者をもつ、多数派の言語であるヒンディー語を国家の公用語とし、他の12の現地言語を州の公用語と定めた。英語はこの時点で、1965年までには使用されなくなるだろうと考えられていた。しかし実際には、ヒンディー語を母語としないインド人と中央政府との間では英語がリングワフランカ（母語が異なるもの同士の共通の言語）として使用されるなど、英語が消えることはなかった。1967年に憲法の修正案が出されたが、それは、ヒンディー語が唯一の国家公用語として国民全体に受け入れられるまでの間、英語を「代用的公用語」とするというものであった。しかし、この政策は、北部のヒンディー語話者のみを有利な立場に置く、不公平なものであるとして、ヒンディー語を嫌う南部のドラヴィダ語話者の反対にあった（石黒, 1992）。結局、どのインド人にとっても母語ではない英語が中立的な言語として生き続け、現在、インドの準公用語として、また、いくつかの州の公用語として重要な役割を担っているのである（榎木 蘭, 2002）。

4.2. インドの英語使用

英語は現在、インドの行政、司法、軍事、経済、通商、教育、文化、メディアにおいて重要な役割を果たしている（本名, 2003）。英語はまた、母語が異なるインド人同士の共通語として使用されている。インド人の中で、インド全域に及び活躍する人というのは、教育程度の高いエリートの場合が多いが、そのような人々はたいてい、それぞれ異なる言語的・地域的・宗教的・民族的背景をもつ。したがって、中立的で高度な使用領域をもつ英語が彼らの共通語となるのである（榎木 蘭, 2002）。

インドにおける英語の現地化を語るうえで忘れてはならないのが、Mulk Raj Anand (1905-2004)、R. K. Narayan (1906-2001)、Raja Rao (1909-) などのインド人作家による英語文学である。たとえば、Raoは、彼の小説

Kanthapura (1938) において、彼の母語であるカンナダ語のリズムを英語で巧みに表現することに成功している (Kachru, 1986)。次の一節は、*Kanthapura*からの抜粋である。

The day rose into the air and with it rose the dust of the morning, and the carts began to creak round the bulging rocks and the coppery peaks, and the sun fell into the river and pierced it to the pebbles, while the carts rolled on and on, fair carts of the Kanthapura fair—fair carts that came from Maddur and Tipper and Santur and Kuppur with chilies and coconut, rice and ragi, cloth, tamarind, butter and oil, bangles and kumkum, little pictures of Rama and Krishna and Sankara and the Mahatma, little dolls for the youngest, little kites for the elder, and little chess pieces for the old—carts rolled by the Sampur knoll and down into the valley of the Tippur stream, then rose again and groaned. . . .
[1963:39] (Kachru, 1986: 49より引用)

また、インド人作家による英語小説では、ヒンドゥー教、カースト制度など、英米文化とはまったく異なるインドの文化が描かれている (Kachru, 1983, 1986; Lowry, 1992)。たとえば、Anandは、インドの文化的状況を英語で描写するために、インドの現地諸語からの語彙の借用、混種による造語、新しいコロケーション (collocation) の使用、状況的有標 (contextually marked) と考えられる、パンジャビ語やヒンディー語の文や節の英語への翻訳といった手法を用いている。次の一節は、彼の小説*Untouchable* (1935)からの抜粋であるが、彼の文体的手法がよく表れている (Kachru, 1986)。

“Ari, you bitch! Do you take me for a buffoon? What are you laughing at, slut? Aren’t you ashamed of showing your teeth to me in the presence of men, you prostitute?” shouted Gulabo, and she looked towards the old man and the little boys who were of the company.

Sohini now realized that the woman was angry. “But I haven’t done any-

thing to annoy her,” she reflected. “She herself began it all and is abusing me right and left. I didn’t pick the quarrel. I have more cause to be angry than she has!”

“Bitch, why don’t you speak! Prostitute, why don’t you answer me?” Gulabo insisted.

“Please don’t abuse me,” the girl said, “I haven’t said anything to you.”

“You annoy me with your silence, you illegally begotten! You eater of dung and drinker of urine! You bitch of a sweeper woman! I will show you how to insult one old enough to be your mother.” And she rose with upraised arm and rushed at Sohini.

Waziro, the weaver’s wife, ran after her and caught her just before she had time to hit the sweeper girl.

“Be calm, be calm; you must not do that,” she said as she dragged Gulabo back to her seat. “No, you must not do that.” [Anand, 1935:37] (Kachru, 1986: 49より引用)

このように、インドの英語文学は、英語が英米の文化を離れて、インドの文化を表現する言語になったこと、すなわち、英語のインド化を示している。

4.3. インド英語

最後に、ごく一部であるが、インド英語の特徴について述べる。インド英語は、標準インド英語 (Standard Indian English) と口語インド英語 (Vernacular Indian English) に大別される (Bhatt, 2004)。⁴⁾ 標準インド英語は、標準イギリス英語と音声的には大きく異なるものの、文法的にはほとんど変わらない。これに対して、口語インド英語は、成文化されておらず、公的な地位をもたない変種、いわゆる、インド英語の非標準変種である。口語インド英語は、文法的にインドの現地諸語の影響を受けており、インドの文化的アイデンティティーを強く表す変種である (Bhatt, 2004)。これが「中間言語」などと呼ばれて非難的になっている変種であるといえる。

4.3.1. 文法的特徴

表1は、口語インド英語の文法上の特徴を標準インド英語と併記したものである。インド人がどちらを使用するかは、場面や状況のあらたまり度が鍵になるといえよう (Bhatt, 2004)。母語が異なる国民同士の共通語として使用するのか、それとも国際語として使用するのかも重要な要素である。また、どちらをどのくらいの頻度で使用するかは、インド人の中でも異なる。さらに、ここに挙げた口語インド英語の特徴のいくつかは、教育程度の高いエリートのインド人によってもくだけた場面などで使用される場合がある。

表1. 口語インド英語の文法的特徴

標準インド英語 (Standard Indian English)	口語インド英語 (Vernacular Indian English)
What has he eaten? Where has he gone now?	What he has eaten? Where he has gone now? (直接疑問文で主語と動詞の倒置が行われない)
I wonder where he works. Do you know where he is going?	I wonder where does he work. Do you know where is he going? (間接疑問文で主語と動詞の倒置が行われる)
You said you'll do the job, didn't you? They said they will be here, didn't they?	You said you'll do the job, isn't it? They said they will be here, isn't it? (付加疑問文には、人称、時制、主節の助動詞に関係なく、 isn't it? が用いられる。isn't it? は、相手に対する敬意 を表す役割をする。標準インド英語に比べて押しつけが ましがなく、やわらかい表現になる)
This furniture is to be removed tomorrow. These mistakes should be corrected.	This furniture may be removed tomorrow. These mistakes may please be corrected. (義務のていねいな表現として、助動詞mayが用いられる)
These boys like only fashionable girls. We speak all of these languages at home.	Only fashionable girls, these boys like. All of these languages, we speak at home. (話題<topic>が文頭に置かれる)

A: "Is he in his office?" B: "Sorry, he left just now only." A: "Did you get tickets?" B: "No, they sold them already."	B: "Sorry, left just now only. (主語が省略される) A: "You got tickets?" (直接疑問文で主語と動詞の倒置が行われない) B: "No, sold already. (主語及び目的語が省略される)"
He has three books on Indian English. Do you want anything?	He is having three books on Indian English. Are you wanting anything? (所有を表すhave、wantなど、通常進行相では使用されない状態動詞に進行相が用いられる)
A: "You are not busy." B: "Yes, I am busy."	B: "No, I am busy." (yes, noは、日本語の「はい」「いいえ」と同じように用いられる)

(Bhatt 2004, Trudgill and Hannah 1985, 榎木蘭 2002にもとづく)

4.3.2. 発音

インド英語の発音は、話者の母語、教育的背景、英語母語話者との接触度によってかなり異なる (Trudgill and Hannah, 1985; 石黒, 1992)。ここでは、一般的な特徴の中で、特にインドらしい特徴を挙げる (Trudgill and Hannah, 1985; 榎木蘭, 2002等)。

- (1) 歯茎音の /t/, /d/, /s/, /l/, /z/ は、舌の先を反らせて舌の裏側で口蓋を叩く感じで発音される。
- (2) 北部インドでは、語頭の /sk/, /st/, /sp/ に /i/ がつく傾向がある。→ たとえば、speak は /ispi:k/ と発音される。
- (3) つづり字発音の傾向がある。→ たとえば、Wednesday は [ウェドネスデー]、university は [ユニヴァルスイティー]、dark は [ダルク] のように発音される。
- (4) thのつづりの /θ/ は /th/ (帯気音) に、/ð/ は /d/ になる。→ たとえば、Thank you は [タンキュー] のように聞こえる。

4.3.3. 語彙

ここでは、インド文化を表す語句の一部を紹介する。これらは、インドの現地諸語からの借用語であったり、英語の形態素や語を組み合わせた造語や複合語であったりする（本名・田嶋・榎木蘭・河原, 2002等）。

- ◆ …ji [ジー]：…さん、様（例：Yamuna ji 「ヤムナさん」）
- ◆ …sahib [サーヒブ]：…さん、…様、旦那（例：Sahib, do you want tea? 「旦那、お茶はどうですか？」 Director sahib 「所長様、所長先生」）
- ◆ prepone：予定を早める（postponeからの類推）
- ◆ good name：ご尊名（例：Your good name, please? 「お名前は？」）
- ◆ intermarriage [インタ(ル)マリジ]：異なるカーストの人同士の結婚
- ◆ interdine [インタルダイン]：異なるカーストの人同士で食事をする
- ◆ communal：（対立する）コミュニティ間の、（特に）宗教間の
communal clash：対立するコミュニティ間の暴力的衝突、特にヒンドゥーとムスリム（イスラム教徒）間の衝突
- ◆ cousin-sister [カズインスイスタル] / cousin-brother [カズインブラダル]：女のいとこ、従姉妹 / 男のいとこ、従兄弟

おわりに

本稿では、英語が国際語といわれる理由について、Outer Circle、すなわち、英語を第二言語とする地域の英語事情を踏まえて、社会言語学的視点から考察した。英語が国際語といわれるのは、第一に、英語が国際コミュニケーションの共通語として、世界的に使用されているからであり、第二に、英語母語話者に、英語を第二言語、外国語として、それぞれ使用する人々を加えると、その使用者数が、ほかの言語と比較して圧倒的に多いからである。英語はまた、Inner Circleの文化、すなわち、英語母語国の文化からOuter Circleの文化に移植され、インド英語、シンガポール英語、ナイジェリア英語というように、Outer Circleの国々の多様な文化的アイデンティティを

も表現する言語になった。これは、英語が国際化したことを示しており、この英語の国際化が、英語が国際語といわれるもっとも重要な理由であるといえる。本稿ではさらに、英語の多様性を捉えるために、四つの観点から Outer Circle の英語を考察し、その妥当性を示した。最後に、Outer Circle の英語の一例として、インドの英語を取り上げ、その使用状況や特徴について概説した。

本稿では、Outer Circle の英語の例として、インドの英語を取り上げたが、英語の多様化に対する理解を深めるには、シンガポール、フィリピン、ナイジェリアなど、他の Outer Circle の国々の英語についても考察すべきであろう。また、本稿では、インドの英語文学の作品にも英語のインド化をみることができると述べたが、非母語話者による英語文学に焦点を絞り、英語の現地化、そして非母語変種による文学的創造性を考察することで、Outer Circle の英語に対する理解を深めることも必要であろう。さらに、Expanding Circle、すなわち、英語を外国語とする地域の英語について考察することも、これからの日本の英語教育のあり方を考えるうえで重要なことであるといえよう。

注

- 1) 図1は、Kachru (1992b: 356等) の「英語の三つの圏」の改訂版であると思われる。改訂版では、各国の人口の記載がなくなり、The Expanding Circle内のUSSRが削除され、Carib[b]ean countries、South Africa、South America、CIS (独立国家共同体) が追記されている。この中のカリブ諸国であるが、Trudgill and Hannah (1985) は、この地域を、英語を母語とする地域の中に入れている。ただし、そこでの英語については、イングランド英語、北アメリカ英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語等の母語変種とは区別して扱っており、たとえば、ジャマイカの英語は、ジャマイカ・クレオールとジャマイカ英語の連続体として捉え、解説している。
- 2) 「中間言語」(interlanguage) とは、第二言語や外国語の学習者が目標言語の習得過程で産出する言語の型のことである (Richards, et al, 1985; Selinker, 1972)。Selinker (1972) は、目標言語における学習者の誤りは、主に五つの過程から生じると述べている。それらの過程には、language transfer (目標言語の使用に母語の言語習慣を持ち込むこと)、transfer of training (たとえば、教材にheしか使用されていないために、sheを用いるべきところでheを用いるなど、目標言語の使用に教材内容や教師の「癖」を持ち込むこと)、strategies of second language learning (目標言語の文法規則を単純化することなど)、strategies of second language communication (コミュニケーションを図ることさえできればよいとして、コミュニケーションに成功した段階で学習をやめることなど)、overgeneralization of TL linguistic material (目標言語の言語規則を過剰一般化すること) が含まれる。Jain (1969) (Selinker, 1972参照) は、strategies of second language learningの例として、インド人英語話者がI'm hearing himのように、通常進行相では使用されない状態動詞にも進行相を用いることを挙げている。
- 3) インド憲法第8付則で指定されている言語は、現在、インド・アーリヤ系言語のアッサム語、ベンガル語、グジャラート語、ヒンディー語、カシミール語、コンカーニー語、マラーティー語、ネパール語、オリヤー語、パンジャブ語、サンスクリット語、スインディー語、ウルドゥー語、ドラヴィダ系言語のカンナダ語、マラヤラム語、タミル語、テルグ語、チベット・ビルマ語系言語のマニプル語の18言語である (榎木蘭, 2002)。
- 4) インド英語は、大きく分類すると標準インド英語と口語インド英語になるが、細かくみると、もっとさまざまな変種を含んでいる。Kachru (1983:70) は、インド英語のバリエーションを“cline of bilingualism” (バイリンガリズムの連続体) や“cline of Englishes” (諸英語の連続体) という概念を用いて説明している。ひとくちに「インド英語」といっても、それは、「教養人の」インド英語 (educated Indian English) からBabu English、Butler English、Bearer English、Kitchen Englishと呼ばれるピジン化したようなものまでが一線上に並んでいると述べている。

参考文献

- Bhatt, Rakesh M. (2004) Indian English: syntax. In Bernd Kortmann, Edgar W. Schneider, Kate Burridge, Rajend Mesthrie, and Clive Upton (eds.) *A Handbook of Varieties of English: A Multimedia Reference Tool*. Vol. 2. 2004. Berlin: Mouton de Gruyter. 2 vols. pp. 1016-1030.
- Comrie, Bernard, Stephen Matthews, and Maria Polinsky (eds.) (1996) *The Atlas of Languages*. London: Quarto Publishing. [バーナード・コムリー, スティーヴン・マシューズ, マリア・ポリンスキー編. 『世界言語文化地図』片田房訳. 東洋書林. 1999.]
- Kachru, Braj B. (1983) *Indianization of English*. Oxford: Oxford University Press.
- Kachru, Braj B. (1986) *The Alchemy of English: The Spread, Functions, and Models of Non-native Englishes*. Oxford: Pergamon Press. Reprinted, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1990.
- Kachru, Braj B. (1992a) Models for non-native Englishes. In Kachru (ed.) (1992) *The Other Tongue: English across Cultures*. 2nd ed. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. pp. 48-74.
- Kachru, Braj B. (1992b) Teaching world Englishes. In Kachru (ed.) (1992) *The Other Tongue: English across Cultures*. 2nd ed. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. pp. 355-365.
- Kachru, Braj B. (1996) Norms, models, and identities. *The Language Teacher*. [WWW document]. Retrieved: <http://www.jalt-publications.org/tlt/files/96/oct/englishes.html>
- Lowry, Ann (1992) Style range in new English literatures. In Kachru (ed.) (1992) *The Other Tongue: English across Cultures*. 2nd ed. Urbana and Chicago: University of Illinois Press. pp. 283-298.
- Oller, John, Lori Beca, and Fred Vigil (1977) Attitudes and attained proficiency in ESL: A sociolinguistic study of Mexican Americans in the southwest. *TESOL Quarterly* 11: 173-183.
- Richards, Jack, John Platt, and Heidi Weber (eds.) (1985). *Longman Dictionary of Applied Linguistics*. London: Longman. [ジャック・リチャーズ, ジョン・プラット, ハイディ・ウェバー編. 『ロングマン応用言語学用語辞典』山崎真稔, 高橋貞雄, 佐藤久美子, 日野信行訳. 南雲堂. 1988.]
- Selinker, Larry (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics* 10: 201-231, reprinted in Richards, Jack C. *Error Analysis: Perspectives on Second Language Acquisition*. London: Longman, 1974.
- Smith, Larry (1999) 「世界に通じる英語を日本人らしく話そう」 *CAT*, December, 18-19.
- Trudgill, Peter, and Jean Hannah (1985) *International English*. 2nd ed. London: Edward Arnold. [ピーター・トラッドギル, ジーン・ハンナ著. 『国際英語』寺澤芳雄, 梅田巖訳. 研究社. 1986.]
- 榎木蘭鉄也 (2002) 「インドーアジア最大の英語使用国」本名信行編著 (2002) 『事典 アジアの最新英語事情』大修館書店. pp. 10-24.
- 本名信行 (1996a) 「ぜひ知っておきたい “アジアの英語”」『Ajia no jidai』10月号, 39-43.
- 本名信行 (1996b) 「インターネット時代の英語事情」『日本語学』明治書院. 11月号, 82-90.
- 本名信行 (2003) 『世界の英語を歩く』集英社.
- 本名信行, 田嶋ティナ宏子, 榎木蘭鉄也, 河原俊昭 (2002) 『アジア英語辞典』三省堂.
- 石黒昭博(編) (1992) 『世界の英語小事典』研究社.
- 中尾俊夫, 日比谷潤子, 服部範子 (1997) 『社会言語学概論—日本語と英語の例で学ぶ社会言語学』くろしお出版.
- 土屋澄男, 広野威志 (2000) 『新英語科教育入門』研究社.